

上級日本語学習者による学術論文の読解における語義の解釈過程

Advanced Japanese Learners' Processes of Interpreting Word Semantics While Reading Academic Papers in Japanese

藤原 未雪

要旨

中国語を母語とする大学院生が学術論文を読むときの読解過程を、読みながら理解した内容を母語で話してもらう方法で調査した。その結果、語の認識や文の構造を正しく把握し、語の辞書的な意味を正しく理解しても、当該の文脈に合った、適切な語義の解釈ができずに誤読することがわかった。論文のキーワードである「距離」「遠い」「レコード」「ソフト」で誤読が見られた2名の学習者の理解過程を質的に分析し、これらの語義がどのように解釈されるかを時系列的に追跡した。その結果、「距離」「遠い」は基本語で比喩的な解釈も可能であり、「レコード」「ソフト」は多義語であることが文の意味の不確実性を高め、誤読の要因となったと考えられた。また、解釈に使うコンテキスト（想定）として専門知識が優先されたことも要因となった。本研究から、初発の解釈を疑い、解釈を修正する柔軟性が読解能力の高さに繋がることから、解釈に対する柔軟性を読解教育で意識的にトレーニングする必要性が示唆された。

キーワード：文章理解、読み誤り、多義語、解釈、修正

1. この論文の目的

本稿は、上級日本語学習者（以下、上級学習者）の文章理解（読解）における語義の解釈と修正過程を質的に明らかにすることを目的としている。

文章理解とは読んだテキストに関する心的表象を作り上げることである（大村 2001:8）。卯城（2010：45）は、読解過程において文字情報は内容のすべてではなく単なるヒントにすぎず、読み手はテキスト情報をたよりに自身が持っている知識を活用しながら頭の中で意味を構築していくと述べている。舘岡（2005：7-9）は読解過程についての先行研究を概観し、読解とは、読み手が書き手の意図をテキストから解読するボトムアップと、読み手の予測を中心とするトップダウンとの相互作用であると述べている。

上級学習者を対象とした文章理解の研究では、上級学習者が自分の専門分野の学術論文を読む場合、さまざまな読み誤りをすることが指摘されている。野田（2014）は、学習者は語句の意味の不適切な推測や文構造の不適切な捉え方、既有知識に基づく不適切な理解をすることを明らかにしている。藤原（2016）は論文読解時に生じる、名詞の意味の誤った理解に焦点をあて、固有名詞を普通名詞と取り違える、複合名詞の全体的な意味が合成できないなどの誤読の類型を見出した。

上述の研究は複数の学習者に共通して見られる誤読の類型を明らかにしたもので、誤読の

共通性を見る上では意義がある。一方、1人の読解過程を時間の流れに沿って追跡することも読解研究のもう1つの重要な側面であるが、これについては研究が十分ではない。

そこで本稿では学習者の読解過程を時系列で追跡する。15名の学習者を対象に、文章を読みながら、理解した内容を母語で語ってもらい調査をしたところ、さまざまな誤読が観察された。特に筆者が注目するのは、語の認識や文の構造という言語形式を正しく把握し、語の辞書的な意味を正しく理解しても、当該の文脈に合った、適切な語義の解釈が正しくできずに誤読する例である。これは次に述べる中級学習者の誤読の特徴とは異なり、上級学習者の誤読を特徴づけるものであると考えられる。中級学習者の読解では、たとえば、学習者はカタカナで表記された「モノ（物、もの）」という語を、その語形の類似性から「メモ（memo）」や「メモリー（memory）」と誤って認識し、つじつまが合うように誤った文脈を作り上げることがある（ポクロフスカ 2016）。このように上級学習者と中級学習者では誤読の特徴が異なることが示唆される。

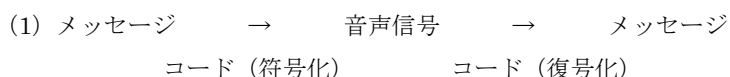
本稿では、読み手が言語形式や語の辞書的な意味を正しく理解しても、当該の文脈に合った、適切な解釈にたどり着けない場合、文の構成要素である語の意味（語義）はどのように解釈され、また修正されているかその過程を明らかにする。具体的には、文章に頻出する語（キーワード）の意味解釈で誤読が見られた2名の学習者の例をとりあげ、語義の解釈の際、学習者がどのようなコンテキスト（想定）を使ったかに注目する。「語」という単位に注目したのは、「文」と異なり分析単位が具体的に明確であることから、意味解釈やその修正過程の議論がしやすいと考えるからである。たとえば、調査で学習者に文の意味をどのように理解したかを確認する際、文の単位だと統語的な分析もからみ、その意味解釈は複雑になり、不確実な要素を排除しきれない。しかし、語の意味ならそうした要素を排除し、一定の確実さを担保できると考える。同時に、語の意味解釈の過程を追うことは、その語から構成される文の意味解釈の過程にもつながる。よって語義の解釈を時系列的に追跡することで読解過程の一端が明らかになるだろう。なお、本稿が扱うのはあくまでも語レベルの意味解釈の過程であり、語の意味解釈が論文全体の内容理解にどのように影響を与えるのかについては稿を改めて論じる。

2. 読解において語義を解釈するというのとはどういうことか

この論文の主要テーマである「読解において語義を解釈する」というのとはどういうことだろうか。それについて、話し手と聞き手の間で行われる語の概念化の関係について概説した岡田（2007）や、スペルベル&ウィルソンが提唱した関連性理論の解題を行う今井（2001）を引用しながら整理しておく。

岡田（2007）によると、たとえば、「犬」という言葉は特定の種の動物を表す記号であり、「歩く」は特定の行為を表す記号であると言えるという。これらの記号と、記号を組み合わせる規則を一緒にしたものを符号（コード）と呼ぶと、日本語も英語もコードであり、コード

モデルによれば、これらのコードによって自動的にメッセージが相手に伝えられる。



話し手は相手に伝えたいメッセージをコードにしたがい、語の結びつきに変換し、音声信号で発する。次に聞き手がその音声信号をコードにしたがって解読し、メッセージが理解される仕組みである。このモデルでは、コンテキストや話し手の意図は考慮されず、コードによってのみ意味が決定され、それが「文の意味」となる。したがって、話し手の意図やコンテキストが深く関わる「話し手の意味」とは大きな隔たりが生じると説明されている。読解においては、「話し手」は「書き手」、「聞き手」は「読み手」、「音声信号」は「文字」と置き換えられるだろう。

岡田 (2007) は (2) のような用例をあげて、コードモデルが扱う文の意味には不確定な要素が多く含まれ、意味的に不完全であるため、以下に述べる語用論のプロセス(a)(b)(c)に頼らないと文の命題¹を復元できないことを論じている。

(2) A : 本、買ってきた？

B : C 先生の本、かなり高くてお金が足りなかった。

まず「C 先生の本」には、C 先生が書いた本、C 先生が訳した本、C 先生が持っていた本などさまざまな解釈が可能である。そのため、(a)多義的な語 (句) の一義化が必要である。また、「高くて」という表現についても、「値段が高い」のように何が高いのかを明らかにしなくては「高い」の意味を確定できない。つまり、(b)直示的表現の対象同定が必要である。さらに、「足りなかった」についても、「C 先生が書いた本を買うのに十分なお金がなかった」のように、何に対して足りないのかという内容も明らかにしないと B の意図を理解できない。ここでは(c)傍点部の内容を決定する手順などを含む飽和 (saturation) が必要である。このように(a)(b)(c)のような語用論のプロセスがなければ命題の復元ができない。上述の例は語用論で話し手の明示的な意味を扱うものである。なお、話し手の意味には非明示的な意味 (暗意) も含まれるが、これは本稿で扱わないため説明を割愛する。

また、今井 (2001:216) は(3)のような用例をあげながら語義の解釈について説明する。

(3) This steak is raw.

(3) ではステーキとして供されている肉が文字通り「一切加熱されていない」はずがない

¹ 今井 (2001:60) によると、命題とはそれが表す内容が真であるか偽であるかを確かめることのできる言語形式であり、内容が真であるか偽であるかを確かめることのできる言語形式は命題である。

ことが（タルタル・ステーキを別にして）聞き手には判っているので、**raw** を「生」ではなく「生焼け」に拡張した解釈が行われる。このように語義は常に「**ad hoc** な」（その都度決まる）ものであると結論づけている。

さらに、今井（2001:12）は、読解の際の解釈の手助けとなるのは読み手の頭の中から取り出された記憶や一般常識であり、これらを想定と言い、読み手が自分の頭の中から取り出した想定をコンテキストと呼ぶ。今井はコンテキストを次のように定義する。

- （4）コンテキスト：発話／書かれたものの解釈にあたって、発話／書かれたものの解読的意味と共に推論の前提として使われる想定である。

以下本稿でコンテキストという場合は（4）の定義に従う。ウィルスン＆ウォートン（2009:30）によると、想定をつくるのは具体的には次のようなことである。

- （5）①雑談か公式の討議の場合かというように発話が行われる物理的環境、②先行する文章の解釈、③文化的知識や科学的知識などの世界知識、④読み手がその場で思い出すことができる読み手独特の情報

ここまでの議論を整理し、筆者の見解を述べる。筆者は読解における語義の解釈は辞書的な意味にとどまらず、当該の文脈を解読する過程で文の解釈とともに一義化されると考える。その意味で語義は文と連動した存在であると言える。

次に、実際の読解指導の観点から語義を「どこまで」深く読む必要があるかについて、日本人の英文読解を研究対象としている卯城（2010:55-56）を引用しながら述べていく。

- （6）The **man** planned the house.

- （7）The **man** bought the house.

（6）と（7）の **man** は、訳読式の指導では「その男は」「その人は」と日本語に直せばよい。しかし、この2つの **man** は、読解プロセスを重視した指導では、語義としてどのようなデフォルトを置くのが重要だと言う。つまり、（7）の **man** は誰でもよいが、それはどんな人でも家を買えるからである。しかし（6）では **architect**（建築家、設計士）がイメージされなければならない。もちろん、新築する際に購入者が家の間取りを考えると可能性も排除できないが、ただ単に「その男は」と横に書いてある英文を機械的に縦の日本語に直すだけでは、「読めたつもり」になっているにすぎないという。注目すべき点として、学習者の理解内容を確認する際、和訳をしてもらっただけでは、横文字を縦文字に機械的に置き換えて安心する「習慣訳」が多く存在すると指摘されていることである。学習者は読解で「文を

訳すことはできるが、内容理解ができない」と言うことがある（卯城 2009:10）が、「習慣訳」がその感覚を説明できる。この時の学習者の訳は、岡田（2007）の説明にある、コードモデルが扱う「意味的に不完全な文の意味」に相当するのではないだろうか。本稿の調査では、学習者の読解過程を明らかにするために学習者に読みながら理解した内容を話してもらったが、そこでも「習慣訳」と考えられるものがあつた。

以上をまとめると、読解において語義を解釈する場合、①書き手が伝達しようとしている文の意味の中で、語義はその文脈に合った形で正しく解釈される必要があること、②解釈の手助けとなるのは読み手の頭の中から取り出された記憶や一般常識であり、これらをコンテクストと呼ぶこと、③学習者には文を機械的に母語に置き換えて「読めたつもり」になっている「習慣訳」が多く存在することを確認した。以下、本稿で学習者の理解過程を分析する際、これらの観点を参考にする。

3. 調査

3.1 調査概要

上級学習者が学術論文の内容をどのように理解したかについて、次の（8）から（12）の手順で調査を行った。

- （8）学習者に研究上必要な学術論文を選んでもらう。
- （9）普段どおりに辞書などを使って論文を黙読し、読みながら考えたことや理解できないところなどを学習者の母語で話してもらう。
- （10）学習者に内容理解を確認する質問を行う。必要に応じて、専門分野についての既有知識の有無などを確認する。
- （11）解釈の際、どのようなコンテクストを使ったかをできるだけ明らかにするために、調査者から積極的に質問を行う。
- （12）上述のやりとりについては中国語の通訳者を依頼し、同時通訳に近い形で通訳してもらう。それらを IC レコーダーで録音し、調査終了後に文字化する。

調査対象者は日本の大学に在籍する大学院生 15 名で、全員、日本語能力試験 N1 を取得し、中国語が母語である。学習者が選んだ論文の分野は、言語学、人文地理学、教育学、経済学、経営学、社会学、観光学、看護学である。調査は 2014 年 6 月から 2016 年 4 月にかけて行った。

3.2 調査結果

15 名の読解調査ではさまざまな読み誤りが観察され、それぞれ「語の識別、語形の類似に関する誤り」「未知語の意味の推測の誤り」「当該の文脈に合った、適切な語義の解釈ができ

ない誤り」「文構造や活用形に関する誤り」「テキストの結束性（照応関係、省略要素の復元）に関する誤り」の5つに大別された。最も多く見られた「未知語の意味の推測の誤り」については、名詞だけをとりあげて藤原（2016）で論じられている。他の読み誤りについては稿を改めて論じる予定である。本稿で取り上げるのは、語の認識や文の構造という言語形式を正しく把握し、語の辞書的な意味を正しく理解しても、「当該の文脈に合った、適切な語義の解釈ができない誤り」である。

4. 読解における語義の解釈過程

本節では、「当該の文脈に合った、適切な語義の解釈ができない誤り」があった学習者 A と学習者 B の理解過程を質的に分析し、その解釈過程について考察する。この2名を選んだのは、論文のキーワードにおいて語義の誤った解釈が観察されたからである。なお、キーワードとは文章全体で繰り返し出現する語で、その正確な理解が文章全体の理解に大きな影響を与える語を指す。キーワードがどのように解釈されるかを時系列的に追跡することで、読解過程の一端が明らかになるだろう。本稿では、論文のキーワードである「距離」「遠い」「レコード」「ソフト」「レンタル」が学習者にどのように解釈されるかを追跡する。

調査では学習者に文の意味をどのように理解したかを母語で話してもらった。注意したいのは学習者が日本語を中国語に翻訳する際、2節で述べたように、英文和訳で横文字を縦文字に機械的に置き換えて安心する「習慣訳」が多く存在する可能性があることである。そこで、学習者の解釈過程をまとめた表1と2において学習者の発話で習慣訳と考えられる場合に（習慣訳）と記し、複数の解釈の可能性がある場合はそれらを併記する。また、キーワードが初出した文の番号を1とし、そこから1文ずつ順に番号を振った。学習者が誤読をした文の番号には*をつける。表中の下線は筆者による。

4.1 「距離」「遠い」の解釈—語義の誤った解釈を修正できた例—

4.1では語義の誤った解釈を修正できた例、4.2では語義を誤った解釈のまま読み続けた例を紹介する。

4.1.1 学習者 A はなぜ解釈を誤ったか

学習者 A が読んだのは、リレーションシップ・バンキングをテーマにした経営学の論文（森健・白田佳子(2010)「企業と銀行の距離はリレーションシップを説明するか」『年報経営分析研究』26）である。リレーションシップ・バンキングとは、金融機関が借り手である顧客企業との間で親密な関係を維持することで、通常入手しにくい借り手の信用情報を入手し、その情報を基に貸し出し等の金融サービスを提供するビジネスモデルである²。この論文では、銀行と融資先の企業が地理的に遠いほど企業は倒産や破産に繋がる傾向があり、地理的

²知恵蔵 2015 の解説「コトバンク」〈<https://kotobank.jp/>〉2017年4月22日閲覧

距離は銀行が得ることのできる企業の信用情報量と相関すると結論づけている。つまり、この論文で使われている「距離」は「銀行と融資先の企業が地理的にどのぐらい離れているか」を意味し、「遠い」は「その地理的な遠さ」を意味する。しかし学習者は、論文著者の意図したそれらの意味に解釈せず、「距離」は「銀行と企業の親密度、両者が互いに持っている情報量」であるという誤った解釈を持ちながら読み進め、「距離」という語が論文中で18回目に現れた時点でようやく正しい理解に至った。

学習者Aが誤った解釈に至る過程とその解釈を修正する過程は、発話データと論文のテキスト分析から次のように考えられる。以下（ ）に表で参照する文番号を記す。

[1]論文タイトルの解釈から誤読する。「企業と銀行の距離はリレーションシップを説明するか」を「企業と銀行の距離は関係(リレーションシップ)によって説明できる」と誤読した。その理由として、「説明する」の主語は「距離」のような抽象的な名詞よりも人などの具象物が来ることが一般に多いため、「距離はリレーションシップを説明する」より「距離はリレーションシップによって説明される」と解釈しやすかったと考えられる(文1)。

[2]文9で「遠い企業」の意味を「企業と銀行の両者の関係が遠いこと。両者の間取引関係がないこと」と誤読する。「遠い」を「地理的な遠さ」ではなく、借り手の信用情報を基に金融サービスを提供するビジネスモデルである「リレーションシップ・バンキング」という専門知識をコンテキストとして使い、「企業と銀行の親密度、銀行が企業について持っている情報量」であると解釈する。

[3]文11でも引き続き「遠い中小企業」を「メインバンクとして企業と銀行の両者の間に十分な相互理解がないこと」と誤読する。そして、文意を「企業と銀行の関係が希薄なため、企業は銀行からの支援を得られず破産する」と解釈する。「遠い」を「地理的な遠さ」ではなく、「両者の関係性や銀行が企業について持っている情報量」であると解釈する。

[4]さらに、文11の「かくして遠い中小企業は」において、副詞の「かくして」を動詞の「隠して」であると発話した。そして、「(情報量を)隠している中小企業は」と解釈したが、その際「(距離が)遠い」を「地理的な遠さ」ではなく、「互いの情報量が少ない」と誤読していたことがきっかけとなった。企業が情報を「隠して」いるため、銀行が企業について持っている「情報量が少ない」と考えたからである。最終的に「銀行は顧客である企業について把握している情報量が実は少ないことに気づいていない」と誤読する。このように「距離」「遠い」の誤読が「かくして」の誤読を誘発した。

[5]文14で「距離」を「互いの親密度／情報量」と置き換えても「企業と銀行が相互に把握

している情報量が少ないほど企業の破産に繋がる」と意味が通るため解釈の修正は起こらない。結局、この誤った解釈は文 30 を読むまで維持される。

[6]文 24 に「距離をアンケートで計測している」とあるが、アンケートという手法は地理的な距離の測定よりむしろ心理的な親密度や関係性の測定になじむことが、「距離＝親密度、関係性」という解釈を一層補強した可能性がある。

[7]文 26 で引き続き「距離」を「企業と銀行が互いに把握している情報量のこと」とであると発話する。文中に「距離を地理情報システムで客観的に計測した」という記述があるにも関わらず、この言語情報を文章理解で使っていない。

[8]文 30 で「企業銀行距離を自動車での移動走行を前提とした地理情報システムにて計測した」と具体的な記述が出てきたところでようやく解釈の修正が行われ、「距離」とは「親密度」ではなく「地理的な遠さ」とであると発話する。

[9]文 30 以降は「距離が遠い」を「地理上の距離が遠い」と正しく理解して発話する。文 41 で再度「距離が遠い」の意味を確認された際も正しく答える。

表 1 学習者 A の「距離」「遠い」の解釈過程

文	テキスト	学習者 A の「距離」「遠い」の解釈
*1	〔論文タイトル〕 企業と銀行の距離はリレーションシップを説明する—倒産企業の実証分析—	「企業と銀行の距離は関係によって説明できる」と解釈。タイトルから誤読する。
2	〔要旨〕 本研究は企業と銀行の <u>距離</u> と、倒産および倒産態様の関係を分析した。	距離（習慣訳）
3	〔要旨〕 その結果、 <u>距離</u> が大きいほど倒産や破産に繋がる傾向があること、この傾向の強さはメインバンクの業態により異なることが明らかになった。	距離（習慣訳）
4	〔要旨〕 企業と銀行の <u>距離</u> が遠くなればリレーションシップが希薄となる可能性は否定できない。	距離が遠い（習慣訳）
5	〔要旨〕 昨今の銀行合併や経営合理化に伴う店舗の減少が企業とメインバンクの <u>距離</u> 増大を通じ中小企業の不利益に繋がっている可能性がある。	距離（習慣訳）
6	本研究は企業とメインバンクの <u>距離</u> に着眼し、両者のリレーションシップ（関係性）を明らかにするものである。	距離（習慣訳）
8	本研究は <u>距離</u> という客観的計測可能な要因に着目し、 <u>距離</u> が倒産ないし破産という事実を説明できるか検証を試みた。	距離（習慣訳）
*9	銀行は貸出先の倒産を避ける動機がある（ダイヤモンド 1994）が、 <u>遠い</u> 企業の救済には移動コストがかかる。	「遠い企業」とは「関係が遠い、メインバンクではなく、両者間に取引関係がないこと」と解釈。
*11	かくして遠い中小企業は銀行とのリレーションシップが薄まり、支援を十分得られず倒産や破産に至ると考えられる。	「遠い中小企業」とは「企業と銀行の間に十分な相互理解がないこと」と解釈。文意は「関係が希薄なため、企業は銀行からの支援を得られず破産する」。ここで「（距離が）遠い」を「地理的な遠さ」ではなく、「情報量が少ない」と理解したために、「（情報量を）隠している中小企業は」と解釈し、それと整合性がとれるように、副詞の「かくして」を「隠して」と理解するような誤読を誘発した。最終的に「銀行は顧客である企業について把握している情報量が実は少ないことに気づいていない」と解釈。

*12	本研究は企業とメインバンクの距離をリレーションシップの代替変数と想定し、距離と倒産有無の関係、及び距離と倒産状態（再生か破産か）の関係を分析した。	「距離」とは「企業と銀行が相互に把握している情報量のこと」と解釈。「代替変数」はよく理解できないと言及。
14	分析結果は距離が遠いほど倒産や破産に繋がる傾向があることを示している。	「企業と銀行が相互に把握している情報量が少ないほど企業は破産に繋がる」という解釈も整合性があり、「距離が遠い」の解釈修正は起こらない。
15	つまり、企業と銀行の距離はリレーションシップの代替変数でないとは言えない。	距離（習慣訳／相互に把握している情報量）
23	一方、企業と銀行距離に関し、貸出可否（ペターセン・ラジャン(2002)）等の研究は見られるが、距離とリレーションシップの関連を探る研究は筆者の知る限り見られない。	距離（習慣訳／相互に把握している情報量）
*24	多くの先行研究は距離をアンケートで計測している。	距離（習慣訳／相互に把握している情報量）、 「先行研究は今も測定しているところである」と解釈。「アンケート」という記述が心理的な調査である「親密度や関係性」を連想させた可能性あり。
25	本研究は銀行が経営支援を通じ倒産や破産を防止するという先行研究の指摘を出発点に、距離をリレーションシップの代替変数として捉える新たな試みである。	距離（習慣訳／相互に把握している情報量）
*26	距離を地理情報システムで客観的に計測した手法も本研究の特徴である。	「距離」は「企業と銀行が互いに把握している情報量」であると解釈。解釈の際、「地理情報システムで客観的に計測」という言語情報が使えていない。
30	取引銀行情報から日本金融名鑑を用い住所を特定、企業銀行距離（以下、本稿では企業とそのメインバンクの取引支店との間の距離を企業銀行距離と呼ぶこととする）、及び銀行本支店距離（以下、本稿では企業のメインバンクの本部と取引支店との間の距離を銀行本支店距離と呼ぶこととする）を、自動車での移動走行を前提とし地理情報システムにて計測した。	初めて「距離」を「地理的な遠さ」とであると正しく理解する。「自動車での移動走行を前提とし地理情報システムにて計測」と具体的な記述が出てきたことが解釈修正を導いた。
33-40	（文番号 33,34,39,40 に「距離」「遠い」あり）	文番号 30 以降「距離が遠い」を「地理上の距離が遠い」と正しく理解。
41	企業銀行距離が遠い、つまり表 2 で右に行くほど倒産企業の遠さが目立つ。	「距離」の意味を再度確認したところ、「企業と取引先銀行の支店を自動車で移動することを前提として計測した地理的距離」と正しく理解。

4.1.2 学習者 A はどのようにして語義の解釈を修正できたか

文 30 で「企業銀行距離を自動車での移動走行を前提とした地理情報システムにて計測した」と具体的な記述が出てきたことが再解釈をするきっかけとなり、学習者は「距離」が「地理的な遠さ」を意味することに気がついた。

4.2 「レコード」「ソフト」「レンタル」の解釈—誤った解釈のまま読み続けた例—

4.2.1 学習者 B はなぜ解釈を誤ったか

一方、学習者 B は語義の誤った解釈を修正できなかった。学習者 B が読んだのは共同物流がテーマである経営学の論文（下村博史(2007)「共同物流事業の成長メカニズム」『日本物流学会誌』15）である。共同物流とは、コスト削減のために複数の荷主が同じ倉庫に共同して商品を保管し、共同で荷役を行い、共同で商品を配送することである³。この論文は、音楽レコード（音盤）や CD、DVD を扱う共同物流会社「日本レコードセンター」を取り上げている。つまり、この論文のキーワードである「レコード」は「音楽レコード（音盤）」、「ソフト」は「市販の CD や DVD」、そして「レンタル」は「CD や DVD のレンタル事業」を意味

³ 「物流用語辞典」〈<http://www.e-logit.com/words/kyodo-butsuryu.php>〉2017 年 4 月 22 日閲覧

する。しかし学習者は、その意味にはとらえず、「レコード」も「ソフト」も「パソコンに関係がある」と発話し、そこから「日本レコードセンター」は「パソコンに関係がある会社」であり、「ソフト」は「パソコンのアプリケーションソフト」とであると解釈した。そのため、後続して出現する「レンタル事業」を「CD や DVD のレンタル事業」ととらえずに、この論文のテーマと自分の専門分野の知識を使って「自社物流をレンタルする」と解釈した。これらの誤読は最後まで維持され修正されなかった。

学習者 B が誤った解釈に至る過程は次のように考えられる。

[1]学習者は翻訳アプリ〈Google 翻訳〉で「レコードセンター」を調べ、「記録センター」という対訳を見るが、この意味ではないと考える。次に、ウェブサイトの Google の検索窓に「レコードセンターとは」と入力したところ、Microsoft の「レコードセンター」の説明が出てきて、「法的文書などのレコードを格納、管理できる集中レポジトリ」と書いてあった。その説明から、「レコード」の意味を正確に知りたくなり、〈Google 翻訳〉で「レコード」と入力したところ、「記録」という対訳が出てきた。この時点で「レコードセンター」はパソコンと関係がありそうだと一旦解釈する（文 1）。

[2]学習者は文 2 から文 18 まで「レコード」と「ソフト」の習慣訳を発話するが、この間ずっと「日本レコードセンターはパソコンに関係があり、パソコンのアプリケーションソフトを作る会社」とであると解釈していることが後述の[3]から読み取れる。

[3]文 19 で NRC の意味を質問された際、「日本レコードセンターはパソコンに関係があり、パソコンのアプリケーションソフトを作る会社。ここまで読んで全部その話になっている」と発話する。文 19 以降もこの解釈は維持される。

[4]「ソフト」は多義語で辞書に「やわらかいこと／ソフトウェア／ソフトクリーム／ソフトドリンク」など複数の語が同じ「ソフト」として記載されている。そのため、「ソフト」の意味の不確実性が高くなる。また、この論文での「ソフト」の意味である「市販の音楽 CD」の用法は語釈にない（文 3,6,7,8）。

[5]論文中で「レコード」と「ソフト」は同じ文中で隣接して出現することが多く、それが一層文の意味の不確実性を増長し、同時に語義の一義化も困難にさせた（文 6,7,8,21,22）。

[6]文 23 から 30 について、学習者は「重要ではない」と判断して読み飛ばす。実はここに、「レコード」「ソフト」「レンタル」の語義を決定づける手がかりとなる「音楽ソフトの媒体がレコードから CD へと変化した」「CD や DVD のレンタル事業が急成長」という重要な記述

がある。

[7]文 62 で「レンタル事業」の内容を質問された際、「NRC（日本レコードセンター）は自社物流を他人にレンタルする」と発話した。学習者は文 23 から 30 を読みとばしたため、レコードと音楽ソフトの繋がりがわからず、後続の「レンタル事業」が「音楽 CD や DVD のレンタル事業」を指すこともわからない。その結果、「レンタル」を解釈するのに他のコンテキストが必要となり、自分の専門分野から「共同物流」という世界知識を使った。

表 2 学習者 B の「レコード」「ソフト」「レンタル」の解釈過程

文	テキスト	学習者 B の「レコード」「ソフト」「レンタル」の解釈
*1	[セクションタイトル] 日本レコードセンターの成長過程	翻訳ソフトで調べて「記録センター」の意味を見るが納得しない。ウェブで「レコードセンターとは」と入力して検索すると、Microsoft の「レコードセンター」が出る。その後、「レコード」だけで検索したところ「記録」と出たため、パソコンと関係があると解釈する。
2	本節では、共同物流を運営する事業者会社の中で、もっとも長い社歴を持つ企業の一つである、日本レコードセンター体制の成長過程を分析する。	レコード（習慣訳／パソコンと関係がある）
3	同社を事例分析の対象に選択した理由は、業界全体の取り組みとして共同物流を事業展開している事例としては、音楽・映像ソフト業界が最も典型的な業界であると考えたからである。	ソフト（習慣訳／パソコンと関係がある）
5	[セクションタイトル] 日本レコードセンターの概要	レコード（習慣訳／パソコンと関係がある）
6	日本レコードセンター（株）[以下、NRC と略称]は、音楽ソフトメーカーの共同出資によって設立された、共同物流の運営会社である。	レコード、ソフト（習慣訳／パソコンと関係がある）
7	現在、同社は約 80 社のメーカーの音楽ソフトや映像ソフトを全国の小売店などに供給している[図 1]。	ソフト（習慣訳／パソコンと関係がある）
8	なお、音楽ソフト業界では、NRC の他に[株]ジャパン・ディストリビューションシステムが同様の共同物流サービスを提供している。	ソフト、レコード（習慣訳／パソコンと関係がある）
14	このような標準化は、NRC を利用するメーカー同士・小売店同士の「水平的な協調関係」の成果である。	レコード（習慣訳／パソコンと関係がある）
18	このように NRC は共同物流を中核に、小売店同士・メーカー同士の水平的協調関係と、メーカー・小売店間の垂直的協調関係を実現している。	レコード（習慣訳／パソコンと関係がある）
*19	これほど幅広い業務プロセスを事業領域に持つことから、NRC は自社の経営コンセプトを「小売店、メーカー、消費者を信頼でつなぐ「パッケージ物流サービスの提供者」と表現している。	NRC の意味を再度確認すると「パソコンのゲームなどのソフトを作る会社。ここまで読んで全部その話になっている」と言う。
20	今日の NRC の共同物流事業を取り巻く外部環境を図 2 に示す。	レコード（習慣訳／パソコンと関係がある）
21	これによれば、音楽ソフト業界におけるあらゆる外部環境変化が、同社の経営に影響を及ぼす可能性のあることが理解できる。	ソフト（習慣訳／パソコンと関係がある）
22	同社が音楽ソフト業界を代表する共同物流を運営しているが故に、この業界のあらゆる競争圧力に晒されているのである。	ソフト（習慣訳／パソコンと関係がある）
23 -30	「音楽ソフトの媒体がレコードから CD へ変化した」「CD や DVD のレンタル事業が急成長し、消費者の利用形態も、商品を購入するのではなく、レンタル店で借りて利用する形態へと、徐々に変化した」と記述あり。	*学習者 B はこの部分は重要ではないと考え、読み飛ばす。
*62	NRC の事例でいえば、NRC が商品を供給する小売店が大型チェーンへと成長し、また、レンタル事業も現れるなどして、新たな小売店のニーズが把握される。	「レンタル」事業の解釈を、「NRC は「自社物流」があるため自社物流を他人に貸すこと」であると言う。

4.2.2 学習者 B はなぜ語義の誤った解釈を修正できなかったか

学習者 B が語義の誤った解釈を修正できなかったのは複数の要因が重なったためであると考えられる。まず、「レコード」「ソフト」は多義語であり、文中で意味を一義化しなければならぬが、辞書に記載されている語釈が不十分なこともあり、複数の意味の候補から文脈に合うものを選ぶのは困難であった。さらに、実時間という制約の中で効率的に読む行為は自然なため、重要ではないと判断した箇所は読まないことも多い。実際調査では学習者 B が読み飛ばした箇所に「音楽ソフトの媒体がレコードから CD へと変化した」「CD や DVD のレンタル事業が急成長」という記述がある。もし、学習者 B がここを読んでいれば、レコードは音盤、ソフトは市販の音楽 CD や DVD を指すことがわかった可能性が高い。しかし、読み手にとって「レコードもソフトもパソコンに関係がある」という解釈が一旦固定されると、新しい手がかりがない限り修正されない。自分の解釈に疑問がない読み手は、読みとばした部分に重要な手がかりがあるとは考えず、読み直す戦略は発動されない。

結局、学習者 B は上述のような読みとばしをしたことで、レコードと音楽ソフトの繋がりがわからず、後続する「レンタル事業」が「音楽 CD や DVD のレンタル事業」を意味するとは考えない。その結果、「レンタル」の意味を解釈するのに他のコンテキストが必要となった。そこで、自分の専門分野から「共同物流」という世界知識をコンテキストとして使い、「レンタルするものは自社物流のシステム」であると解釈した（文 62）。読み手に接近した情報である専門分野の知識をコンテキストとして使った解釈は、学習者にとって自然であり修正されなかった。本例は、まず、「レコード」と「ソフト」の解釈で誤り、それが修正できないことで「レンタル」の解釈にまで影響が及んだものと言える。

学習者 B は調査後のインタビューで、「この論文は簡単だ。なぜわかりきったことをだらだら書くのかわからない」と話し、誤読していたという認識はない。学習者 B は最後まで誤った解釈を維持したが、文章を読み進める上で違和感がなかったようである。

5. 考察

5.1 当該の文脈に合った、適切な語義の解釈を困難にする要因 1—語の意味的な特性—

読解とは書き手が伝達しようとしている意味を、文字情報をたよりに読み手が解読する活動である。しかし、言語形式は万能ではなく、意味確定度に不十分性があるため、読み手が書き手の伝達しようとしている意味を解読するのに語用論的プロセスが必要なのは 2 節で述べたとおりである。調査で観察された語義の誤読の潜在的要因を考えると、「距離」「遠い」は基本語で意味が広いことに加え、定義が難しい語であり、辞書的な記述は難しいと言える。また、「距離」が「遠い」を「両者の親密度」「互いに把握している情報量が少ない」と比喩的に解釈するのも十分に可能であり、辞書の「遠い」の語釈にも「人間関係でへだたりがある、親密さを欠く」とある（岩波国語辞典 第 7 版 新版：2011）。一方、「レコード」「ソフト」は多義語であるため、複数の意味の候補の中から文脈で意味を一義化し、確定しなくて

はならない。これらの要因は文の意味の不確実性を高めることとなり、同時に語義の解釈も困難にさせた。

5.2 当該の文脈に合った、適切な語義の解釈を困難にする要因 2—専門知識—

調査で読んだ論文は学習者の専門分野であったため、解釈の際に使うコンテキストとして専門分野に関する知識が学習者にとって接近していて使いやすかったと考えられる。読み手の期待通りに関連性があり、少ない処理コストで最初に思いつく解釈が読み手の選ぶ解釈となる（ウィルスン&ウォートン 2009:90）。「距離」「遠い」の解釈では学習者 A にとって、借り手の信用情報を基に金融サービスを提供するビジネスモデルである「リレーションシップ・バンキング」という専門知識がコンテキストとして使いやすく、そこから導かれた「銀行が持っている情報量が少ない企業は、十分に支援を得られず倒産する」という解釈も理にかなうものであった。一方、「レンタル」の解釈では、学習者 B はこの論文の主要概念である「共同物流」という専門知識をコンテキストとして使い、「日本レコードセンターは自社物流を持っているため自社物流を他社に貸す」と結論づけた。卯城（2009）は、第二言語読解では文章に書かれていない内容を背景知識によって連想したり、背景知識と矛盾するテキスト情報を理解する際に背景知識が優先され、誤った解釈をしたりすることがあると述べる。これは背景知識が文章理解を阻害することを示すものだが、学習者 A と学習者 B の事例も同様である。

5.3 語義の解釈の修正プロセスを重視した読解教育

卯城（2010:54）は読解が不得意な読み手ほど当初の解釈に固執することを示し、解釈を柔軟に修正できることが読解能力の高さに繋がると述べる。筆者も読解調査の経験からこの考えに強く同意する。解釈に対する柔軟性こそが読解の鍵であり、意識的なトレーニングで養うべき能力ではないだろうか。

卯城（2010:57）は解釈の修正プロセスを重視した読解教育として次のように提案する。1 つは、読解過程での漸次的な内容確認の目的で、ペアを組ませて 1 文 1 文読ませながら、どのように理解が変化していくかを発話プロトコル法で口頭報告させる方法である。2 つめは、教師の発問は学習者の読解プロセスを形成するという考えに基づき、*fact finding*、*inference*、*generalization* など読み手を育てる質問をバランスよく与える方法である。筆者はこれらが経験できる教授法や教材を作ることが重要だと考える。解釈を柔軟に修正できるスキルは、実際に解釈の修正プロセスの経験を積むことでしか意識化されないと考えるからである。しかし、このスキルは従来明示的に教育されてきたとは言い難く、これこそが上級学習者が読解で身に付けるべき重要なものだろう。

6. まとめと今後の課題

本稿では、語の認識や文の構造を正しく把握し、語の辞書的な意味を正しく理解しても、当該の文脈に合った、適切な語義の解釈ができずに誤読する学習者の理解過程を分析し、語義の解釈過程を明らかにした。誤読の要因として、語の意味的な特性や学習者の専門知識が考えられた。また、読解では一旦作られた解釈にとらわれずに柔軟に修正できることが重要で、読解スキルとして意識的に教育される必要があることも示唆された。今後は語より上位の言語単位である文やテキストの結束性に注目し、これらが学習者にどのように解釈されるかを統合的に分析し、読解中に頭の中で行われる処理を可視化したい。

謝辞

本稿の執筆にあたり、査読委員の先生ならびに石黒圭先生には貴重なご指摘とご助言をいただいた。本研究は、国立国語研究所基幹研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」の研究成果の一部である。記して感謝を申し上げる。

参考文献

- 今井邦彦（2001）『語用論への招待』大修館書店
- 岡田聡宏（2011）「アドホック概念について」『言語・文化・社会』9, pp.25-45
- ディアドリ・ウィルスン／ティム・ウォートン（2009）今井邦彦（編）『最新語用論入門 12 章』大修館書店
- 卯城祐司（2010）「第4章 英文読解における読み手の理解修正プロセス」木村博是ほか（編著）『英語教育大系第10巻 リーディングとライティングの理論と実践—英語を主体的に「読む」・「書く」』大修館書店
- 卯城祐司（2009）『英語リーディングの科学—「読めたつもり」の謎を解く』研究社
- 大村彰道（2001）「序章」大村彰道 監修 秋田喜代美・久野雅樹編集『文章理解の心理学 認知発達、教育の広がりの中で』北王路書房
- 館岡洋子（2005）『ひとりで読むことからピア・リーディングへ—日本語学習者の読解過程と対話的協働学習』東海大学出版会
- 野田尚史（2014）「上級日本語学習者が学術論文を読むときの方法と課題」『専門日本語教育研究』16（1）, pp.9-14.
- 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫（2011）『岩波国語辞典第7版新版』岩波書店
- 藤原末雪（2016）「中国語を母語とする上級日本語学習者が学術論文を読むときの困難点—名詞の意味の誤った理解を中心に—」『日本語／日本語教育研究』7, pp.165-180.
- ポクロフスカ オーリガ（2016）「キーワードの読み誤りが文章理解に及ぼす影響—ウクライナ人初中級日本語学習者のケーススタディ」『日本語／日本語教育研究』7, pp.148-163.

（ふじわら みゆき 言語社会研究科博士後期課程）